

ちえのわ農学校小史

黒澤友彦・菱井優介・西村俊 自然文化誌研究会

A Historical Sketch of Chienowa Farming School

Tomohiko KUROSAWA, Yuusuke HISHII, and Shun NISHIMURA

The Institute of Natural and Cultural History (INCH)

1. 「ちえのわ農学校」設立の経緯

東京学芸大学公開講座「子どものための冒険学校」（1988～2001：全 13 期）、「ぬくい少年少女農学校」（2002～2004：全 3 期）を経て、「ちえのわ農学校」（2005～現在）の設立・開催に至った。主催は「サークルちえのわ」という東京学芸大学の公認サークルである。

それまでの「ぬくい少年少女農学校」を主に運営していた自然文化誌研究会はこの頃、山梨県北都留郡小菅村に新たなフィールドを求め、拠点となる古民家を借りた。小菅村で本格的に活動を行うため、自然文化誌研究会の事務局（東京学芸大学環境教育実践施設の農場職員を兼務）も小菅村に移動した。そのような状況で、東京都小金井市の東京学芸大学構内で、毎月 1 回の農学校を維持することが難しくなった。検討を重ねた結果、前年度から活躍している学生達を中心となって環境教育実践サークル「ちえのわ」を立ち上げ（2004 年夏）、農学校を継承していくことになった。当時、ぬくい少年少女農学校の活動も開催規模やスタッフのサポート力の兼ね合いにジレンマがあり、参加者との関係性をより深めながらスタッフと参加者が互いに学習・成長をできる形を模索している時期でもあり、農学校以外にも活動の幅を広げられる母体として学生サークルという形を選んだ。2004 年 12 月に東京学芸大学公認サークルの「サークル

ちえのわ」として発足し、サークルちえのわの活動の中で農学校も「ちえのわ農学校」として継承された。

1) サークル設立の経緯と「ちえのわ」に込めた思い（菱井優介 設立者・初代代表・大学院 1 年生）[2015 年発行自然文化誌研究会「冒険と子どもたち～冒険学校のあゆみ」より引用]

当時、農学校スタッフであり、自然文化誌研究会のキャンプスタッフでもあった自分たち大学生が、自然文化誌研究会の下部組織ではなく、新しい組織として立ち上げたのには、わけがあります。

公開講座として「農学校」を継続ができないことが決定する以前から、農学校にかかわるスタッフの組織化の議論は何度かありました。「ぬくい（少年少女農学校）」を始めたころ、自然文化誌研究会の青年部を作ろうというような話もありました。そして 2004 年は、特に多くの時間をかけて、今後について語り合いました。その中で、公開講座「ぬくい少年少女農学校」を単に引き続きやっていくためではなく、農学校をはじめとする環境教育活動の充実、質の向上を図っていきたいという思いを共有し、大学のサークルとして独立する方針を固めました。

公開講座の農学校では、スタッフの勉強会などで冒険学校の考え方やノウハウを学び、活動について議論しました。それらをもとに実践する中で「農

学校」流の進め方を培ってきました。自らも学び、参加者とともにつくる環境学習の場を学生主体で自らの力で発展させたい。独立心・挑戦そんな思いから新しい組織としてスタートを切りました。

その名に込めた思いがサークル化を提案した資料にありました。

・団体名「ちえのわ」について

自然の中で暮らす中で、人類は多くのことを自ら学び、考え、実践し、経験してきました。その中で生まれたのが、“智慧”なのです。

“智慧”とは、事の道理や筋道をわきまえ、正しく判断する心のはたらき。事に当たって適切に判断し、処置する能力。単なる学問的知識や頭の良さではなく、人生経験や人格の完成を俟(ま)って初めて得られる、人生の目的・物事の根本の相にかかわる深い叡智(えいち)。と辞書にあります。

ひとが自らの経験の中で得てきた多くの“智慧”を継承し、次世代へと繋げていく。また、今日の多くの諸問題を解決に導くため“智慧”をしぼり、持続可能な社会を創造していく。そのために、自らの“智慧”を深め、多くのひとの“智慧”を“環”として繋げ、広げていく。複雑に絡まった今日の諸問題“知恵の輪”が解けるようにという想いをこめて『ちえのわ』という名を考案しました。

団体名：環境教育(実践)(活動)サークル ちえのわ

目的：環境教育の実践活動。環境教育に関わる活動の企画・運営を通じて、部員の能力を向上させる環境活動・教育活動の企画実践。

活動内容：「食」「農」をテーマとした小中学生対象の体験学習の企画実

践。そのほか、各々のテーマを深める。

[2004年11月16日 ミーティング資料より抜粋]

2. ちえのわ農学校の活動

※18期まで継続する全ての回を記載せずにまとまっている報告を載せます。

1) 2009年度(第5期)活動報告(東京学芸大学サークルちえのわ 第5期スタッフ一同)

2009年度第5期ちえのわ農学校は、小学校3~6年生までの計10人を対象に開催しました。今年は「種から胃袋まで」を理念として掲げ、畑作業や稲作、様々な文化体験を通して、子どもたちとともに私たちスタッフも大きく成長することができました。農薬を使わない野菜作りでは、新芽を虫に食べられてしまったこともありましたが、子どもたちは残念がっていましたが、虫たちも生きていくためにこの野菜が必要だったのだと学ぶことができました。4月の初めての活動では保護者にぴったりとくっついて不安げな様子だった子も、回を重ねるごとにハツラツとした笑顔が見られるようになり、スタッフとともにあちこちを駆け回り、重たい農具を持って畑を耕してくれるまでになりました。最終日に行ったアンケートでは、様々なご意見・ご感想をいただきました。その中から一部ご紹介します。

・子どもの声

「(田植え) みんなで息をそろえていっしょにやるのが楽しかった。」「おいしい野菜のおかげできらいだった野菜もたべれるようになりました。」「いつも食べている野菜が、こんなに手間がかかるとは思いませんでした。」

・保護者の声

「ちえのわに通うようになり、学校生活でも積極的に人とかかわるようになってきました。」「子供がこの一年で、何か…物事をじっくり考える姿は大きな変化です。」「普段はできない『しろかき』でのドロドロ体験などは特にうれしそうでした。」「一年間の活動を通して、子どもたちのこうした変化が何よりの成果であったと思っております。私たちの活動にご協力をいただき、また、いつもあたたかく見守ってくださり、本当にありがとうございます。ここに厚く御礼を申し上げます。そして、これからもどうぞよろしくお願いたします。」

2) 『第 11 期ちえのわ農学校 (2015 年 4 月～2016 年 1 月)』報告 (2015 年度代表 井守智大(東京学芸大学 3 回生)) [自然文化誌研究会 会報ナマステ NO. 123 より引用]

「サークルちえのわ」は東京学芸大学の学生サークルです。大学内にある農園を借りて、「ちえのわ農学校」と題して毎月 1 回地域の子どもたち (最初に年間参加募集しています) と食農体験活動を行っています。

・ちえのわ農学校とは

ちえのわ農学校は、次の 3 つの“わ”を理念に、4 月から翌年 1 月までの毎月 1 回 (全 10 回) 活動を行っています。

*自然のわ：自然の様々な表情と向き合いながら、「種から胃袋まで」の道のりを実践することで、命・自然とのつながりを五感で感じるきっかけづくりをする。

*人のわ：農学校だからこそできる体験を通じて子どもたちが仲間とのつながりを感じられるきっかけづくりをする。

*知恵のわ：昔ながらの知恵や文化にふれ、身近なものを見つめなおすきっかけづくりをする。

ちえのわ農学校では、お米作りや野菜の栽培を中心に様々な自然文化体験を行っています。第 11 期となる今年度 (平成 27 年度) は以下のようなことをしました。

・第 1 回 (4 月 18 日)

スタッフや他の友達との初対面。でもアイスブレイクや農園散策をするうちに緊張がほぐれて、帰る頃にはみんな笑顔でした。畑の活動では自分の育てる野菜を決め、種をまきました。どのように野菜を育てたらいいのかスタッフと相談して収穫までの目標も立てました。

・第 2 回 (5 月 23 日)

5 月はみんなで田植えをしました。田んぼに 1 列に並んで、みんなで順番に「ちえのわ米」の苗を植えていきます。はじめは泥のぬかるんだ感触が気持ち悪いけど、みんなで植えていくうちにだんだん楽しくなってみんな笑顔で田植えができました。また、「ちえのわ米」には、うるち米ともち米があり違いを確かめることもできました。



図 1. 田植え

・第 3 回 (6 月 13 日)

5 月の活動で田植えをした田んぼには生き物がたくさん! ということで田ん

ぼの生き物観察を行いました。生き物といっても昆虫など動いている生物だけではなく動かない植物などにも目を向けて観察できました。午後には野菜の場所の目印として各自で畑の野菜プレートを作りました。「ここが自分たちの畑」感が強くなったとともに、より一層育てている野菜への愛着をもつことができたのではないのでしょうか。

・第 4 回(7 月 11 日)

7 月は竹を使って風鈴や水鉄砲、万華鏡、竹笛を作りました。のこぎりで竹を使いやすい大きさに切ったり、錐で穴をあけたり、それぞれが試行錯誤しながら工作しました。お昼には流しそうめんを食べました。暑さを忘れて、流れてくるそうめんを口いっぱい頬張っていました。自分で作った水鉄砲を使って水遊びもして元気に農園を駆け回りました。



図 2. 田んぼの後の水浴び(水遊び)

・第 5 回(8 月 22・23 日)

8 月はキャンプ!農園にテントを張ってみんなで 1 泊します。企画も盛りだくさん。まずはヤマメさばき。生きたヤマメを自分の手でさばいて焼いて食べることを通して、命の大切さやつながり、そして命をいただくということを学びました。次は今日寝る場所を確保するために一緒に寝る友達とテントを協力してたてました。テントを立てた後は待ちに待った夏野菜の収穫。

トマトやナスやかぼちゃ、たくさんの野菜を収穫することができました。

午後からは自由時間、田んぼの手入れのために雑草を刈ったり、イナゴを捕まえたり、ドロケイをして夏の農園を満喫しました。夕食も自分たちで作りました。昼間に収穫した野菜を使って、シンガポールカレー・ツナとトマトのカレー・焼き野菜カレーの 3 種類のカレーを作りました。調理もみんなで手分けして、協力して進めます。ちえのわで栽培・収穫した野菜を調理し食べることで、「種から胃袋まで」の道のりを達成することもできました。カレーを食べている間に日も暮れてきました。夜はナイトハイクと影絵遊びをしました。暗闇に包まれた夜の農園はいつもとまた一味違います。影絵遊びは、みんなでストーリーを考えました。子どもたちの協力し合う姿に、友情の深まりを感じました。

2 日目の朝には 1 日目に捕まえたイナゴの佃煮をみんなで食べ、再度命をいただく大切さを学びました。その後、農園の植物の葉を使って染め物をしました。葉の形の違いを生かして工夫を凝らしたり、葉によって色の出方に違いがあることを発見したりと、子どもたちひとりひとりの個性がうかがえました。



図 3. 草木染め

・第 6 回(9 月 12 日)

9 月は冬に向けた畑の活動をしまし

た。畑のグループに分かれて冬野菜の育て方を調べてから冬野菜の種を植えます。春に一度やっていることもあって、子どもたちの道具の使い方や種のまき方も慣れてきました。田んぼの様子も見に行きました。毎月ちょっとずつ田んぼの様子は見ていますが、今月は田んぼに網がかけられているのをすぐさま発見。これは鳥に稲穂をつつかれないようにするために、つまり少しずつお米ができていくという証拠ですね。来月が楽しみ！

・第 7 回(10 月 10 日)

10 月はいよいよお米の収穫です。一人一本鎌を持って、稲を刈り取っていきます。刈り取って、数束ずつひもでしばってまとめ、そしてそれを干していきます。体は疲れているのにみんな笑顔で活動してました。刈り取られた田んぼでもいろいろな生き物が！！子どもたちは生き物を観察したり捕まえたりしていました。稲はひと月干しておいて、来月食べられるように加工します。また 10 月は里芋の収穫をしました。里芋の葉っぱといえばトトロ！！みんなでトトロになりきりました。里芋はみんなで甘露煮にして食べました。少し肌寒い日だったのであったまりましたね。収穫と秋の味覚を堪能することができました。



図 4. 野菜の収穫

・第 8 回(11 月 14 日)

11 月は残念ながら天気は雨模様。収穫したお米を、食べられるように加工していきます。そう、脱穀と精米です。足踏み脱穀機と唐箕を使って脱穀し、精米は精米機の力を借りました。また穂を外した稲わらは細かく切り、肥料になるように田んぼにまきました。稲を余すところなく有効に使おうとする昔の人の知恵や工夫を感じながら活動することができました。12 月はいよいよちえのわ米がお昼ご飯に登場します。また、11 月はサツマイモの収穫をしておやつは焼き芋を食べました。

・第 9 回(12 月 12 日)

12 月は、ほうき、コースター、ツリーの藁工作を行いました。ひとりひとり個性的な作品を作り、作った作品の工夫した点、感想をコメントカードに書いて藁工作でつくった作品とともに展示をし、他の友達がどのような作品を作ったのかを見てまわりました。また 12 月はお餅つきをしました。こちらもちえのわで栽培・収穫したもち米を使いました。重い杵を持って餅をつく子どもたちの表情は、大変そうながらもとても楽しそうでした。

・第 10 回(1 月 23 日)

1 月はいよいよ最終回。数日前に降った雪ので農園は一面雪で真っ白です。まずは 1 年間を通して畑で学んだ知識のクイズをゲーム形式でしました。クイズの正解がわからない子もわかる子も楽しみながら畑の知識を復習しました。そして今度は一年間の活動を思い出しながら答えるクイズゲームをやりました。そして今度は農園全体を使って隠されている写真を探しました。写真を見て「こんなことあったね」、「懐かしいね」って思いながら

ふりかえりをしました。1 月農学校の最後は修了式です。1 年間の活動のライドショーを見て、最後はみんな修了証を手にも、スタッフと全員で写真を撮りました。寂しさを感じながらも、「またどこかで会いましょう」と笑顔でお別れをしました。

・スタッフより

ちえのわ農学校に初めて参加してくれた子ども、11 期以前にちえのわ農学校に参加してくれたことがある子どもが半分半分でちえのわ農学校はスタートしました。初めて参加をする子どもも参加したことがある子どもも最初は緊張した表情をしていましたが、ちえのわ農学校を通して出会ったスタッフ、そしてほかの子どもたちと打ち解けていく姿がとてもうれしかったです。最後にはちえのわの活動が「楽しい」とか「来年もまた来たい」と言ってくれた子が多く、ちえのわ農学校が子どもたちにとって、自然の“わ”や人の“わ”を感じることでできる、ひとつの居場所になれたのではないかと思います。私たちスタッフも未熟ゆえ試行錯誤の日々でしたが、その分、子どもたちとの活動を通してたくさんのお話を学ばせてもらいました。1 年間ちえのわ農学校を支えてくださった皆様、そして子どもたちには感謝の気持ちでいっぱいです。

3) 『第 15 期ちえのわ農学校 (2019 年 4 月～2020 年 1 月)』報告 (2019 年度代表 橋本和幸 (東京学芸大学 3 回生)) [自然文化誌研究会 会報ナマステ NO. 139 より引用]

皆様こんにちは！ 私は東京学芸大学サークルちえのわ、第 15 期 (2019 年度) 代表 橋本和幸です。私たち「ちえのわ」は、学芸大学構内にある教材

植物園 (農園) で地域の子どもたちと食農文化体験活動をしています。

・ちえのわ農学校とは

「サークルちえのわ」は東京学芸大学のサークル。スタッフのほとんどが大学生で、教育・自然体験・農体験に興味を持って集まりました。「色々な体験、ちえのわ農学校でしか出来ない体験をしてほしい！」そんな思いを持って、4 月から翌年 1 月まで毎月 1 回 (全 10 回)、「ちえのわ農学校」を地域の子どもたちに向けて開催しています。そんなサークルちえのわは、3 つの“わ”を理念として活動を行っています。

*自然のわ：自然の様々な表情と向き合いながら、「種から胃袋まで」の道のりを五感で感じるきっかけづくりをする。

*人のわ：農学校だからこそ出来る体験を通じて、子どもたちが仲間やスタッフとのつながりを感じられるきっかけづくりをする。

*知恵のわ：昔から受け継がれてきた知恵や文化にふれ、身近なものを見つめなおし発見するきっかけづくりをする。

ちえのわの活動の柱となっているのは、畑と田んぼでの活動です。

畑では一年を通じて夏野菜と冬野菜の栽培をします。毎年最初の活動で子どもたちは畑に種を植え、それから収穫まで毎月畑のお世話をします。今年 (第 15 期) の活動では、夏はオクラやカボチャ、トウモロコシやスイカなどを育て、冬には大根や白菜、ほうれんそうなどを育てました。持って帰るのが大変なほど大きく育った野菜もありました！

田んぼでは米作りをしています。5 月に泥だらけになりながら田植えをし

て、毎月稲の成長を記録し、田んぼに触れています。10 月になると、稲は大きく立派に育ち、それを刈って、干して、その翌月には脱穀・精米、そして 12 月の活動ではみんなでおにぎりを作って美味しく食べました！もち米も育てたので、1 月には餅つきもしました。

この二つの柱となる活動に加えて、毎月その季節に合った企画を用意して活動しています。今年は例えば、タケノコ掘りや染めもの、流しそうめんに焼き芋、竹工作・わら工作などなど！それぞれの季節ごとに企画を考え、みんな楽しく過ごしました。8 月には農園で 1 泊だけですがキャンプもしました。

・第 15 期の活動を振り返って

さて、ここまでちえのわ農学校について紹介させていただきました。ここからはせっかく頂いた場なので、私個人の視点から、感想などを含めて今年の活動の話をしていきます。

私は、15 期サークルちえのわの代表を務めました。私が代表として行った初めての活動である 4 月農学校の光景は、1 年近く経った今でも鮮明に覚えています。そして私だけでなく、子どもたちにとっても最初の農学校。しかも 15 期は初めて農学校に参加してくれた子も多く、大きな緊張や不安の中にいた子もいると思います。けれど、いざ農園に来て、自然やスタッフと触れあいながら楽しく活動していたのを見て、「15 期ちえのわ農学校もきっと良い農学校になるだろう」と確信し、「良い農学校にしていこう」と誓いました。大げさかもしれませんが本当です。でもそれは、きっと私だけじゃなく、スタッフみんなが思っていた筈です。実際、15 期農学校はとても楽し

く、充実したものになったと思います！

さて、そんな 4 月農学校ではタケノコ掘りを行いました。全然見つからず苦戦していたり、見つけたタケノコを夢中になって掘っていたり、いろいろな姿が見れました！また、先ほども言ったとおり、4 月は種や苗を植える始まりの季節です。これから時間を共に過ごす畑で最初の活動も行いました！それから、移り変わる季節を感じながら、様々な活動を行ってきました！



図 5. タケノコ掘り、田植え

これは 5 月の田植えの様子。スタッフと子どもが一丸となって、田んぼにお米の苗を植えていきます。田植え初体験の子も多く、みんな泥だらけになりましたが、一生懸命植えていました。いつも何気なく食べているお米ですが、苗から触れ、経験することは、子どもにとっても、そしてスタッフにとっても貴重な経験になってくれたら嬉しいなあと、思ったりしてまし

た。



図 6. 稲刈り

10 月には、こんなに大きく稲穂が成長して、稲刈りを行うことができました！雨が続いた後の稲刈りで、悪条件ではありましたが、みんなの頑張り、無事刈ることができました。



図 7. 野菜の収穫

そしてこちらは畑の様子。1 年を通して畑のお世話をしていく中で、みんなの手つきが慣れてきて、畑に詳しくなってきたのかと頼もしく感じました。

保護者さんから、「持って帰った野菜をお家で美味しくいただきました」

と報告されるたび、本当に嬉しく思っていました！ 持って帰れなさそうなほど大きく育ったのは、スタッフの予想を遥かに超えてましたが、それでも、みんなが真剣に畑に向き合ってくれて良かったです！

こちらは 8 月農学校で行ったヤマメさばき。一人一人が慣れないながらも頑張っておヤマメをさばき、そして命と向き合いました。



図 8. ヤマメさばき

「お泊り企画」というのがメインの 8 月農学校ですが、イナゴを取って佃煮にしたりなど、「命」や「食」についても触れられたんじゃないかなあと感じてたりします。お泊りも、とても楽しく一晩を過ごせました。皆で泊まる経験は、「ちえのわ」を一層強い“わ”で結んでくれました。他にも 8 月は INCH 主催のキャンプに農学校の子も参加してくれて、忙しくもとっても楽しい毎日でした。

毎月企画を考え、準備し、運営していくのは本当に大変でした。けれど振り返れば、自信を持って「楽しかった」と言えます。色んな季節を色んな子ども達・スタッフと過ごせたのは、幸せでした。これからも、楽しい農学校を続けていけたらと思っています！

そんなちえのわですが、興味を持っていただけたら是非、ちえのわの HP やブログを見てみて下さい。長くなってしまいましたがここまでお付き合い

いただき、ありがとうございました！

4) 第 15 期～第 18 期ちえのわについて
(執筆：小菌美優(こそこのん)、内容確認：氏家芽実(めみ))

・第 15 期(2019 年度・執筆者 1 年時)

○4 月～翌年 1 月までの計 10 回、月 1 回の農学校を開校した。対象は、小中学生 18 名。時間は、10 時から 16・17 時まで。昼食・おやつ提供を行っていた。8 月は、農園の環境センターに泊まり、2 日にわたって農学校を行っていた。初めて参加したとき、子どもたちだけでなくスタッフも楽しめるイベントであること、1 つの企画の中にも様々な工夫や配慮があることを印象的に思った。そんな雰囲気のある農学校であったと記憶している。

・第 16 期(2020 年度・執筆者 2 年時)

○新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、大学により課外活動を禁止されたため、農学校は開催できなかった。

○8 月から 10 月にかけて、計 6 回の「ちえのわ特別企画」をアメーバブログにて配信。内容は、例年農学校を開催している東京学芸大学の農園についてや、農学校での畑・田んぼの活動について。きっかけは、「子どもたち(保護者の方)から、メール等で『農学校開催を楽しみにしている』との声をいただく中、開催を見送る状況が続いたため、参加者の子どもたちに、少しでも農学校を感じてほしい。」との思いから。

○従来通りの形式でのちえのわ農学校の存続が危ぶまれ、これからのちえのわ農学校について話し合う機会が複数回設けられた。農学校の新しいあり方を模索する時期であった。この時に、「従来の活動ができていない中で、1

年生に魅力ある活動を届けられていない、交流も少ない→定期的に何らかの活動をして、1 年生もちえのわに関われるようにしたい、活動があれば役割も生まれ、自然に関わりを作っていくことができるのでは」との思いから、次年度スタッフ農学校のアイデアが生まれた。

・第 17 期(2021 年度・執筆者 3 年時)

○前年と同じように、学外者を学内に呼ぶことがほとんどできなかったため、スタッフのみで、月に 1 回、全 10 回の農学校を開催。大学から対面での課外活動を許可されていない時期は、ZOOM を使い、オンラインでスタッフ農学校を開催した。

▶オンライン農学校の内容は、例年の農学校の紹介とそれに関連するクイズ、レクリエーションなど。

▶対面スタッフ農学校の内容は、例年の農学校の紹介とその体験(たけのこほり、稲刈りなど)、「ちえのわかるた」など。

スタッフのみでの農学校、ましてやオンラインでの農学校は、今までのちえのわ農学校とは目的が異なる部分があった。そのため、開催する意味があるのかといった話し合いもしたが、結果的に見れば、スタッフ間の交流や知識の共有、企画の考案など、来年の準備をする良い機会になっていたと考えている。

○特例として、例年はない「2 月農学校」を、参加者を呼んで開催した。オンライン・対面両方の準備をして臨み、コロナの状況を鑑みて、オンライン開催となった。参加者の子どもたちと初めて関わり、来年の準備をする機会となった。

・第 18 期(2022 年度・執筆者 4 年時)

○執筆している 11 月時点まで、4 月よ

り毎月、対面での農学校を開催。コロナの制約により、昼食やおやつ提供なしの午後のみ開催となった。コロナ前の活動内容を踏襲しつつも、新しい考え（役職を学年混合にする、本代掻きを保護者の方も一緒に体験できるようにする、など）を取り入れながら農学校を作っている。

・今後の後輩たちへ…

コロナ禍によって、農学校の形式が変化しました。コロナ以前の農学校を知る代は、私(2023年卒)を最後にいなくなります。先輩方から受け継いだ、そして私が「入サーしたい!」と思った当時の農学校の形を残しきれなかったことを、少しだけ残念に思います。しかしむしろ今後は、過去にとらわれず、皆さんなりの農学校を作ってほしいと思います。今まで続いてきた形式に当てはまるもののみが「ちえのわ農学校」なのではなく、形式が何であれ、「サークルちえのわ」が作るものが「ちえのわ農学校」になるのだと、私は思っています。(小菌)

私たちが経験した「コロナ禍」のように、活動が制限されるような出来事がまた起こらないとも限りません。そんな時は、「今この状況だからこれはできない」ではなく、「この状況でも、この方法ならできる」と考えてみてください。きっと新たな道が見つかると思います。また、悩んだ時は、周りを見渡してみると心強い仲間がいっぱいいるはずですよ! 1人で抱え込まず、周りに相談してみてください。OBへの連絡も待っていますよ!(氏家)

5) 第 18 期サークルちえのわ活動報告 (第 18 期代表 小平温太(東京学芸大学 3 回生)) [自然文化誌研究会 会報 ナマステ N0.149 より引用]

みなさま、お久しぶりです。「東京学芸大学 サークルちえのわ」です。私たちは大学構内の教材植物園(農園)で、地域の子どもたちと食農文化体験活動をしています。また、INCH が開催しているキャンプにもスタッフとして参加しています。コロナ禍での空白を経て、やっと今年度は子どもたちを大学に招いた活動ができました。

今回は、当サークルが開催している「ちえのわ農学校」の紹介と、来年度 4 月から始まる「第 19 期ちえのわ農学校」の案内をさせていただきたいと思います。

・ちえのわ農学校とは

「サークルちえのわ」は東京学芸大学のサークルであり、メンバーの大学生は教育・自然体験・農体験に興味を持って集まりました。「ちえのわ農学校でしか出来ない体験をしてほしい!」という思いから、「ちえのわ農学校」を地域の子どもたちに向けて開催しています。

そんなサークルちえのわは、3つの“わ”を理念として4月から翌年1月まで毎月1回(全10回)の活動を行っています。

*自然のわ：自然の様々な表情と向き合いながら、「種から胃袋まで」の道のりを五感で感じるきっかけづくりをする。

*人のわ：農学校だからこそ出来る体験を通じて、子どもたちが仲間やスタッフとのつながりを感じられるきっかけづくりをする。

*知恵のわ：昔から受け継がれてきた知恵や文化にふれ、身近なものを見つめなおし発見するきっかけづくりをする。

[第 18 期の活動報告]

日程	4/16	5/21	6/18	7/16	8/20	9/10	10/15	11/12	12/10	1/21
活動内容	開校式、農園散策 夏野菜種まき	畝づくり あぜぬり	田植え お茶づくり	かかし作り	これまでの振り返り 冬野菜会議 田んぼクイズスイカ割り	冬野菜の種まき	焼き芋 稲刈り はざかけ	脱穀 籾摺り 精米 どんぐり工作	わら工作 イルミネーション	書初め 米粉づくり 修了式
	夏野菜の栽培					冬野菜の栽培				
	田植えから脱穀・精米までの稲作体験 自然を対象にしたあそびなど									

今年度はご飯を一緒に食べることを制限されていたため、例年あるような昼食づくりはできず、活動時間も短縮せざるをえませんでした。それでも、農学校のスタイルである畑と田んぼ活動は基調としながら、季節を感じる企画を多く取り入れることができました。また、子どもたちにやってみたい企画や作ってみたい野菜のアンケートを取るなどして、それぞれの自主性を尊重した活動を進めました。



図 9. 本代掻き (5 月)



図 10. 野菜の種まき (9 月)

畑では一年を通じて野菜を栽培しました。夏にはエンドウ豆、さつまいも、きゅうり、すいか、かぼちゃを育て、冬には大根、ニンジン、小松菜、カブ、ブロッコリー、カリフラワー、キャベツ、ミニごぼうを育てました。夏ころにはウリハムシの被害が大きく、失敗してしまった苗もちらほら…田んぼでは、うるち米ともち米を作り、稲を刈り、干し、教科書に出てきたような器械を使って脱穀・精米をしました。子どもたちから、おうちに帰って調理してもらった感想を耳にすることもあり、自分たちの手で作った食べ物を頂くことのありがたみを感じました。

・第 18 期の活動を振り返って

今年度は、コロナ禍のなか感染対策と折り合いを付けながら、どうすればちえのわらしい農学校が開催できるかを模索し続けた一年となりました。前例踏襲では打開できない状況のなか、新しいことへの挑戦たじろぐこともありましたが、その分これまでにはない農学校を作り上げることが出来ました。

野菜やお米を苗から育てることの難しさ、泥の生温かな感触、芝生に寝転がったときの高揚感…これらはちえのわに関わらなければ体験できないものばかりです。教科書では決して学ぶことのできない、けれどもきっと人生を

豊かにするエッセンスをたくさん享受することができた一年でした。



図 11. たけのご掘り (4 月)

末筆になりますが、ちえのわは学生だけではなく、子どもたち(ちえっこ)やその親御さん、農園および大学の職員、INCH など様々な方々に支えられています。ちえのわに関係するすべての皆さまに感謝申し上げます。学生一人ひとりが「楽しい」と感じる事ができ、ひいては子どもたちのワクワクにつながるようなちえのわであり続けられるよう、今後とも励んでいきます。

3. 現在のちえのわ農学校[サークルちえのわ、ちえのわ農学校ホームページ、自然文化誌研究会 会報ナマステ NO.149 より]

1) 第 19 期ちえのわ農学校活動要旨

2023 年も第 19 期生の募集をしています。

正式名称：ちえのわ農学校

対象：小学校 3 年生～中学校 3 年生までの男女 10 名（応募者数が定員に達した場合は抽選を行います）

スタッフ：東京学芸大学学生を中心に 20 名程度

・ 2023 年度 年間予定

月 1 回の土曜日（全 10 回） 13:00～17:00+本代掻き（4 月または 5 月を予定）

※日程・内容ともに変更する可能性があります。

ありがとうございました！

最新情報は「サークルちえのわ」HP にて発信しておりますので、QR コードを読み込んでご確認ください。そのほか、主に農学校の様子を発信しているちえのわのブログ、Twitter、Instagram アカウトもありますので、ぜひ覗いてみてください！



「サークルちえのわ」HP



@GAKUGEI_CHIENOWA
ちえのわInstagram



ちえのわのブログ(アメブロ)



ちえのわTwitter

図 12. ちえのわ SNS へのリンク集

場所：東京学芸大学 環境教育研究センターおよび教材植物園(彩色園)

費用：実費負担年額 15,000 円（食費、保険、材料費等）

主催：東京学芸大学サークルちえのわ

URL：<http://www.gakugei-chienowa.org/>

共催：NPO 法人自然文化誌研究会

URL：<http://www2.plala.or.jp/npo-inch/>

後援：小金井市教育委員会

日程	4/15	5/13	6/17	7/15	8/19	9/16	10月 (日付 未定)	11/18	12/16	1/20
活動 内容	開校 式、 農園 散策	田植 え	かか し作 り				稲刈り	脱穀、 粃す り、 精米	わら工 作	修了式、 お正月遊 び
1年を通しての活動（畑作業）：夏野菜・冬野菜の栽培										
1年を通しての活動（田んぼ作業）：田植えから脱穀・精米までの稲作体験										

●10月は1泊2日の合宿を行う予定なので、年度初めに参加者と相談のうえ、日にちを決めたいと考えています。

●活動内容で未定な部分もありますが、子どもたちのやりたいことを聞きながら決めていきたいと考えています。昨年度は育てた野菜の調理、季節を感じる遊びや工作などを行いました。

2) 農学校の基本情報

日程…4月～1月の毎月1回土曜日に行います。

対象…小学3年生～中学3年生 10名
(年度ごとに、希望者の中から抽選で決定)

・内容

①農に触れる～畑、田んぼ、農耕文化～

年間を通した野菜づくりや、米づくり、農耕文化にまつわる行事の体験活動を行います。種から育て、手入れをし、収穫した作物を自ら調理して味わうことで、「種から胃袋まで」の流れを学び、自分の周りにあるいのちを感じます。

②文化に触れる

ちえのわでは、以下のような文化に触れることができます。

○地域・日本古来の伝統食や、保存食などの「食」の文化

○稲作、畑作（また、その時に使う道具）の文化

○生活を面白く、快適に過ごす知恵（草木染めや木の器づくりなどのものづくりの知恵）の文化

・関わっている人

ちえのわ農学校のほとんどは、大学

生が企画しています。

しかし、それだけでなく、学校の農園を管理している人（農業の知識を教えていただく）、協賛団体の人（活動に必要なものをお貸し頂く、当日の運営にご協力いただく）など、大人たちも活動にかかわっています。

また、農業指導講師、文化体験講師を招いて、より質の高いプログラムを提供するよう常に心がけて活動しています。

・私たちが大切にしていること

①子どもの「やりたい！」を尊重する
農学校の活動の中に自由時間を設けることで、虫取りやおやつ作りなど子どものやりたいことができるようにしています。私たちは可能な限り、子どもたちの選択の自由を広げていきます。

②発見を重視し、興味を広げる体験活動

知識を伝授する場所ではありません。様々な活動を通じて新たな見方、感じ方が育って欲しいと感じています。

③自分で考えて動く、一緒に考える

活動で生まれた「なぜ？」に、ただ答えを与えることをしません。自分で見つけた答えこそ、特別なものになるからです。

4. ちえのわ農学校へのおもいーよい活動とは、を問い続けよう（執筆：菱井優介（サークルちえのわ創設者・初代代表））

もう 20 年になるのかという驚きとともに感慨深く、小史の原稿を読ませていただきました。私たちが大事にしてきた思いや考えを代々の学生たちが受け継ぎ今も大切にしてくれていること、活動をつないできてくれたことを本当に嬉しく思います。これまでちえのわにつながっていただいた方への深い感謝と尊敬の念が尽きません。ほんとうにありがとうございます。

今思えば、ちえのわの前身から農学校に関わった数年間、私にとっての体験活動の指導者、プロとしての原点だったな、と改めて気づかさせてくれました。活動本番よりも準備の場面の方が多く思い出されます。水やりしたり、誰もいない農園をフラフラ歩いたり、何度も企画書を書き換えたり、時には後輩に書き換えさせたりして、遅くまで仲間と議論しました。この時の「もっといい方法があるはずだ」とか「体験の意味は」とか「活動の流れは」とか、深く議論していたことが後の、今の私にも大きく影響を与えています。

この活動記録を読み返して、農学校という活動が「種から胃袋まで」を中心に回っていく「らせん運動」しているように見えてきました。四季がめぐり、参加者も学生も入れ替わりながら、農学校が少しずつ変化、移動しているそんな風に。1, 2 年ではその変化は気づきにくいものですが、一期一期を積み重ねて、変化している様を「○○のわ」や「やりたいを尊重」といった表現にみてとれます。世代が変わるごとに、新しい視点や工夫を加えつつ、

「種から胃袋まで」を体現しているように思えます。

この 20 年で、東日本大震災やコロナ流行など社会的に大きなインパクトを与える出来事が何度もありました。そうした流れ、変化の中でもまれながらも、農学校が継続してきたこと自体が大きな成果です。農園という空間の力を借りて、農作業の知識や経験の乏しい学生が試行錯誤しながら、参加者のために作り出した空間で、ほかの何にも代えがたい体験をともしにする仲間をつくる。三間の創出と表現されたりしますが、農学校がまさにそうした価値のある活動に育ってきたと言えるでしょう。

また、この 20 年で「教育」や「地域」をとりまく環境も変化しました。コロナ後、子どもたちの「直接体験」の重要性はますます高まるばかり。農的な里山環境は都市部から失われ、山間地でも荒廃の一途をだっています。日常の中に農耕文化に触れられる環境があるのは、より少なくなってきました。「農学校」の存在意義はますます大きくなっています。だからこそ、よりよい活動とは何か、を問い続けたい。なんとなく、ではなく、なぜ、それをするのか。その体験の意味は、よりよい活動とは、参加者にとってよりよい体験とは、問い続ける。「ちえのわ」は考え、語り合い、カタチにしていく実践の場であり続けてほしいと願っています。

ちえのわと農学校から離れて十数年。この小史は、過去の自分と今も熱意をもってちえのわの活動を続けてくれている後輩たちに恥じぬ仕事をこれからも続けようと思わせてくれました。これからもよきライバルとしてちえのわが発展することを期待しています。

参加する子どもたちにとって、主体となる学生にとって、もっといい体験、もっといい活動をつくるために。これからも問い続けよう。「わ」をつなげるために。

またいつか、農園で会える日を楽しみにしています。

2023 年 3 月 菱井優介